

A-4) 小児モヤモヤ病に対する外科的治療成績

石川 達哉・宝金 清博
吉本 哲之・上山 博康 (北海道大学)
阿部 弘 (脳神経外科)

目的：小児モヤモヤ病に対する、直接および間接的の血行再建術の意義を明らかにする。対象及び方法：過去10年間に当施設で治療を行い、その後経過観察を行っている小児モヤモヤ病患者31例を対象とした。男性11例、女性20例、年齢は1～15才（平均6.5才）。全例が虚血型の発症で、一部の症例を除いて、直接（STA-MCA bypass）及び間接（EDAMS）的の血行再建を併せて行った。外科的治療の安全性、長期予後、脳血管撮影所見、SPECTによる脳循環の評価などの面から検討を行った。

結果：周期の症状悪化例は無く、治療後の明らかな虚血発作は1例に認められたのみであった。長期観察例でも全例無症候性に経過している。脳血管撮影上、モヤモヤ血管は減少し、SPECT 上も脳血流動態の改善を認めた。

結論：randomized study は行われていないが、小児モヤモヤ病に対して、直接及び間接的の血行再建術は優れた治療法とおもわれた。

A-5) Von Recklinghausen's disease に合併したもやもや病類似病変の1例

林 俊哲・日下 康子 (東北大学)
白根 礼造・吉本 高志 (脳神経外科)

Von Recklinghausen's disease においては各種臓器の血管異常を伴うことが知られているが、脳血管病変として稀にもやもや病と類似した主幹動脈閉塞が認められることがある。しかしもやもや病とは異なり進行性の増悪を呈することは少ないと考えられていた。今回我々はもやもや病と同様の臨床経過を辿った若年者例を経験し、手術的治療で良好な結果を得たので報告する。

症例は8才女児。2才時に痙攣発作を発症し、Von Recklinghausen's disease と診断され、抗痙攣剤を投与され経過観察されていた。5才時より左手指のしびれが出現し、7才時に施行した脳波検査で過呼吸後の rebuild up を認め、血管撮影を施行した。もやもや病類似の血管病変を指摘されて当科紹介となった。血管撮影上の病期は右が stage II、左が III であった。当科入院後、虚血症状が出ていた右側に対しまず間接的の血行再建術を施行した。術後に左側の症状が出現したため4ヶ月後左側

にも施行した。術後経過は良好で術後1年現在は症状を認めていない。

A-6) 自然血栓化巨大ガレン大静脈瘤の稀な1例

金 奉均・石井 正三 (石井脳神経外科・
尾田 宣仁 (眼科病院脳神経外科
外科 神経内科)

頭痛にて発症した自然血栓化巨大ガレン大静脈瘤の稀な1例を経験した。症例は13才、女性。不明熱および頭痛にて発症。成長・発達過程に特記事項なし。経時的なCT、MRI 所見より、頭痛発症時頃に完全血栓化したガレン大静脈瘤と診断した。血管造影にて著明な静脈還流異常が認められ、ガレン静脈・直静脈洞・両側横静脈洞の血栓化により、脳表在静脈は、① S.S.S. を逆行し、ethmoidal sinus から鼻粘膜へ ② 海綿静脈洞から pterigid plexus へ ③ 後頭蓋窩の dural sinus から emissary v. への経路を介し、また、脳深部静脈は、Lasjaunias らの言う dorso-caudal および ventro-rostral draining pathway である ① diencephalic v. ② striate v. の胎生期遺残静脈に依存した。以上、血行動態の上からも大変興味深い症例を呈示する。

A-7) 被殻出血に対する慢性期血腫吸引術の意義

今田 隆一・川瀬 誠 (宮城厚生協会泉
病院脳神経外科)

【目的】当院で経験した被殻出血の手術症例を retrospective に検討し、慢性期における血腫吸引術の適応について検討した。【症例および結果】① 1985～96年2月の間に当院で経験した被殻出血手術症例は99例で、開頭による血腫除去が52例、血腫吸引術が47例（超音波下：21例、CT 下：26例）であった。血腫吸引術のうち、発症1週間以上の慢性期に行われたのは、1週間目2例、2週間目2例、4週間目3例の計7例であった。② 2週間目までの4例は意識状態の改善の目的で行われ、4週間目の3例は眼底にて鬱血乳頭の発現を契機に手術が行われたものであった。③ 4週間目の3例は手術はきわめて容易で、血腫はほぼ完全に除去され、術前後に麻痺の程度、言語などの高次脳機能、Barthel index の改善が認められた。【結論】意識障害の程度が軽度の症例の中にも発症4週間目の前後に鬱血乳頭を示す症例があり、